



(左) 動物園にて、クマの檻の前に突き刺さったロケット弾  
2022年9月 ミコライウ



(右) 独立記念日に水遊びをする母子。遠くで空襲警報が鳴っていた  
2022年8月 ミコライウ

第34回  
林忠彦賞  
受賞記念写真展

佐々木 康  
SASAKI KO

34  
HAYASHI  
TADAHIKO  
AWARD

ヘルシンキ——ミサイルの降る夜に

XEPPOCH

「まるでわるい夢みたいだ」

2022年9月30日、ミサイルの降る夜。現地で知り合ったアンドリーからテレグラムが入った。既視感漂う不吉な言い回し。それは、ウクライナの国民的詩人、タラス・シェフチェンコが1844年に書いた『夢(喜劇)』という詩にあまりにも酷似していた。

すべての者にその人の運命があり、その人の広い道がある。ある者は築き、ある者は破壊する。——(写真集冒頭に掲載) 大ロシアの圧政や農奴制を風刺し、自由と独立、人間の尊厳を謳ったものだった。

第34回林忠彦賞は、2022年2月24日のロシア侵攻後、単身ウクライナに乗り込み、2022年の4ヶ月間と2023年の3ヶ月間にわたり滞在し、戦時下の真の姿に迫った佐々木康さんの写真集・写真展『XEPPOCH(ヘルソニーミサイルの降る夜)』に輝いた。

1972年埼玉県生まれ。54歳。フォトジャーナリスト。少年時代は父の仕事の関係でアメリカ、ドイツで暮らす。1993年アメリカ・アイオワ州のコミュニティ・カレッジで写真表現に出会う。帰国後は、1996年広告写真のプロダクションに勤め、撮影技術を覚えた。

1998年からはカンボジア、タイ、インドネシア、フィリピン、パレスチナなどを取材、様々なメディアに写真を持ち込む。2003年「ニューヨーク・タイムズ」での撮影が入る。さらに、2005年から2010年まで「クローリエ・ジャポン」の創刊からフォトエディターを務めた。2011年、東日本大震災では、幾度も現地に入り、被災した様子や復興の過程を撮影した。しかし、2020年にはコロナ禍に見舞われ写真の仕事は激減

する。2021年東京五輪では仮設観客席の建設や解体現場で働いた。

そんな時、ロシアがウクライナに攻め込んだのだ。「自分の目で確かめたい、行けば何かできるのではないか」。強い気持ちで湧きあがってきた。

最初に入ったのは首都キーウ。そこから前線へと南下していった。それと同時に海外取材の経験から現地での人的ネットワークも広げていく。元弁護士のアンドリー、軍事用ドローンの部品を作っていたセルゲイらとの出会いは、さらに多くの人たちへも繋がっていった。その縁で義勇兵たちにも受け入れられ、ロシア軍に占領されていたヘルソン市奪還へと向かう部隊にも同行させてもらうことができた。反転攻勢では多くの死傷者が出た。一進一退の中でSNSが入る。「ロシア軍が撤退したらいい」。確認のためヘルソン市の中央広場に到着するとそこは解放された市民や兵士たちでお祭り騒ぎとなっていた。

ウクライナの人たちと話すとき、この戦いに勝たないと国をなくすという意識がとて強いのが伝わってくる。国は兵士が守っている。彼らのためにと大人から子どもまでもが何らかの形でかかわっていた。それは強大な軍事大ロシアに対する市民たちの手作りの戦いそのものだった。

美しいウクライナの風景。そのなかで人々は食べ、眠り、笑い、泣き、祈り、戦い、死にそして生まれる。日常の先に戦争があり、日常と非日常が交錯する中で人々は逞しく生きてきたのだ。

佐々木さんの写真には、悪夢(わるい夢)を乗り越えていこうとするウクライナ人たちの確かなる誇りも写っていた。

(周南市美術博物館館長 有田順二)



## 第34回林忠彦賞 決定

## 「XEPCHO ヘルソン — ミサイルの降る夜に」

佐々木 康(ささき こう)



「ヘルソン」とは、2022年2月に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻により占領されていたウクライナ南部に位置する州と州都の名前で、佐々木さんにとっては、多くの人がいつか戻るべき故郷の名、戦地から無事を祈って待つ家族の元へ帰る旅を象徴する場所でもあります。

佐々木さんは2022年の4ヶ月と2023年の3ヶ月をウクライナで暮らしました。毎晩のようにミサイルが降る中、友人と互いの無事を確かめるようにチャットを交わし、やがてその友人を介して兵士たちと時間をともにするようになりました。その時期に撮影した写真や友人、兵士たちとのチャットの内容をまとめたのがこの写真集です。地平線まで広がる小麦、ひまわり畑。美しいウクライナの風景。そのなかで、人々が食べ、眠り、笑い、泣き、祈り、戦い、逃げ、死に、そして生まれ、命は繰り返されてきました。私たちが生きる日常のすぐ先に戦争があり、日常と非日常が交錯する中で、人々が逞しく生きていること。戦争が非日常ではないことを改めて考えさせられる作品です。

## 受賞記念写真展

4月25日(土)～5月10日(日)  
周南市美術博物館観覧  
無料

佐々木 康

## プロフィール

1972年生まれ。フォトジャーナリスト。米紙「ニューヨーク・タイムズ」をはじめ欧米各国の新聞や雑誌の依頼を受け、20年にわたり報道の現場で写真を撮り続けている。雑誌「クーリエ・ジャポン」では2005年の創刊から写真編集者を務めた。2024年には世界報道写真コンテスト、アジア部門の審査員。撮影していない時には石油プラント工場の現場などで作業員として働く。

## 参加者募集 ※事前申込み

## ■ 授賞式 4月25日(土)14:00～16:00

会場／ホテルサンルート徳山 ハーバースクエア

・第一部 授賞式

・第二部 講演会「古層を撮る」

小林紀晴氏(林忠彦賞選考委員)

定員／40名(先着順)

入場・参加  
無料

## ■ 佐々木康氏トークショー

4月26日(日)10:30～

会場／美術博物館 講座室

話し手／佐々木康氏

聞き手／有田順一(館長、林忠彦賞選考委員)

定員／40名(先着順)

※いずれも電話でお申し込みください(周南市美術博物館 0834-22-8880)

## まどさんについてのおはなし会 報告

周南市出身の詩人まど・みちおさんの命日(2月28日)にちなんで、例年、まどさんにゆかりの方をお招きして「まどさんについてのおはなし会」を開催しています。

今年は、絵本画家でイラストレーターの黒井健(くろい けん)さんをお招きして、3月1日に行いました。美術博物館では2012年に「黒井健 絵本原画の世界展」を開催しており、今回、まどさんとの交流を温かみ

のあるエピソードとともにお話いただきました。その中で、黒井さんがまどさんにインタビューされた際の大変貴重な音声も聞くことができました。

参加された方からも、「まどさんのお声が聞けて嬉しかったです」「まどさんらしさが特に感じられた会でした」といった感想が寄せられ、まどさんの新たな魅力を知る機会となりました。



LAWSON

**母の日ギフト**

Mother's Day

受付期間

3/3[TUE]～5/3[SUN]

LAWSON STATION

**ローソン徳山動物園前店** 0834 32-8363

※画像はイメージです。

## 美博クイズ～!〈147〉 もんだい

林忠彦の「茶室」シリーズが連載されていた「婦人画報」は、1905(明治38)年に創刊されたよ。初代の編集長は誰だろう?

ヒント 山口県ゆかりの文学者、ジャーナリストだよ

周南市美術博物館  
常設展示

- 常設展観覧料：一般200円(160円) 大学生等100円(80円) ( )内は20名以上の団体  
 ※18歳以下および70歳以上無料 ※林忠彦受賞記念写真展の会期中(4/25~5/10)は常設展無料  
 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳等をご持参の方とその介護の方は無料
- 休館日：月曜日

展示室 3 コレクション展示室

美博のコレクション展～春～ 4/1(水)～5/31(日)



河上大二「夜桜」制作年不詳 水彩・紙

美博の収蔵品から、春を感じる作品を中心に紹介します。森寛斎「義家勿来関桜花吟詠之図」、河上大二「夜桜」など、桜が描かれた作品も展示します。ぜひ美博周辺の桜並木とともにお楽しみください。

今年は、山口県出身の日本画家・松林桂月の生誕150年にあたり、桂月の作品を紹介したコーナーもあります。



松林桂月「春秋二曲屏風」(二曲一双のうちの一つ) 制作年不詳 絹本彩色

展示室 4 林忠彦記念室

茶室 I 4/1(水)～6/30(火)

「茶室」シリーズを2期にわたって紹介します。林忠彦は「婦人画報」の連載で、7年にわたり国宝や重要文化財をはじめとする各地の茶室を撮影しました。創刊1000号記念出版として、写真集「茶室」(婦人画報社 1986年)が発刊されます。あとがきに、「撮れば撮るほど難しく、今までの経験を全部さらけだし、私の写真手法のすべてをつぎこんだ気がする」と記しています。

京都府大山崎町にある待庵は、千利休が手掛けたなかで、唯一現存する茶室といわれています。天正年間(1573～92)頃に造られ、貴重な初期茶室遺構として国宝に指定されています。

二畳の茶室ですが、入ったときに意外と広く感じる空間構成や床の間の質感などが、写真からリアルに伝わってきます。



「妙喜庵 待庵の床」撮影 林忠彦

展示室 5 まど・みちおコーナー

4/1(水)～6/30(火)

まどさんは、ちょうどこの絵が描かれた頃から抽象画を描き始め、3年余りにわたり絵画制作に没頭しました。

この作品は、「目」のような形が印象的ですが、タイトルからすると、これは池なのでしょう。三角に描かれたのは鳥でしょうか。いろいろと想像がふくらみます。

ボールペンやフェルトペン、水彩絵の具を使って画用紙に描かれています。作品に近づいて、紙を削っている表現にも注目してみてください。



「鳥のくる池」1961(昭和36)年5月30日

徳山の歴史 特設コーナー

児玉源太郎と西南戦争 4/1(水)～6/28(日)

今年は、児玉源太郎の没後120年にあたります。特設コーナーでは、児玉源太郎にまつわる資料を紹介します。

この錦絵には、熊本城に籠城中の政府軍が酒宴にふける様子が描かれ、児玉源太郎もお酒に酔ったのか、居眠りしています。

しかし、実際には、熊本城に籠城した政府軍は、食糧が枯渇した状態で、薩摩軍の猛攻に耐え戦いました。

錦絵「熊本城ノ将校賊軍嘲嘆之図」明治10年



周南市美術博物館 その他の4月の展覧会 9:30～17:00(入館は16:30まで)

観覧無料

■ 手編み作品展 ..... 4/18(土)～4/19(日) ((4/18は11:00～)、最終日は15:00終了)【展示室1】

美博クイズ～! (147) こたえ

くにきだどほ 国木田独歩 (1871～1908) だよ

ちげんろう ちちおや しごと かんけい ようしょう きやま  
 千葉県生まれだけど、父親の仕事の関係で幼少期を山口県内で過ごしたんだよ。東京での学生生活を離れた後、柳井に移り、20歳から22歳の頃に住んでいた家屋が今も残っているんだ。

舞台設営・照明・音響・映像

周南プラウト株式会社

〒745-0801 周南市大字久米2766番地1  
 TEL:0834-33-9348 FAX:0834-34-3083  
 Mail:info@shunan-prout.jp

## ART and HISTORY インフォメーション

周南

周南市美術博物館 ☎0834-22-8880

第34回林忠彦賞受賞記念写真展  
佐々木康「XEPCOH ヘルソンーミサイルの降る夜に」  
4/25(土)～5/10(日)美博のコレクション展～春～  
4/1(水)～5/31(日)

手編み作品展 4/18(土)～19(日)

周南市郷土美術資料館 ☎0834-62-3119

企画展 林忠彦写真展「東海道を撮る」  
尾崎正章常設展 季節を感じて「春」  
～5/17(日)

岩国

吉川史料館 ☎0827-41-1010

吉川広家公没後400年記念  
開館30周年記念展  
第三期 広家の関ヶ原 ～4/12(日)

防府

防府市地域交流センター(アスピラート) ☎0835-26-5151

防府市施行90周年記念  
ヨシタケジンスケ展かもしれない ～4/12(日)

山口

山口県立美術館 ☎083-925-7788

スウェーデン絵画 北欧の光、日常のかがやき  
4/28(火)～6/21(日)

中原中也記念館 ☎0839-32-6430

企画展 | コラボレーション展示  
「秋の陶工と中原中也 土の詩情」  
4/22(水)～7/26(日)

萩

山口県立萩美術館・浦上記念館 ☎0838-24-2400

コレクション展「三輪窯-陶の造形-」 ～4/26(日)

萩博物館 ☎0838-25-6447

テーマ展示「海を拓いた萩の人々」 ～6/21(日)

長門

香月泰男美術館 ☎0837-43-2500

香月泰男 ヨーロッパへの旅 ～5/24(日)

下関

下関市立歴史博物館 ☎083-241-1080

企画展「薩長盟約と長府藩」 ～4/12(日)

～レゾナック永源山公園の中にある美術館～

## 周南市郷土美術資料館・尾崎正章記念館

- 9時30分～17時(入館は16時30分まで)
- 観覧料: 一般200円(160円) 学生等100円(80円)  
( )内は20名以上の団体 ※18歳以下および70歳以上無料
- ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、  
戦傷病者手帳等をご持参の方とその介護の方は無料
- 休館日: 月曜日

アクセスは  
こちらをご覧ください

企画展

中・小展示室 5月17日(日)まで開催中

## 林忠彦写真展「東海道を撮る」

周南市出身の写真家・林忠彦が晩年、病魔と闘いながら完成させた『東海道』。写真集は亡くなる数ヶ月前に出版されました。助手や多くの写友に支えられて撮影した、林の執念の結晶でもある作品を展示します。



林忠彦 撮影「平安神宮」1990年

色鮮やかな紅枝垂桜が、優雅な社殿に映えて美しい。平安京の大内裏朝堂院を模した建物は、明治28年(1895)の建立。江戸時代にはなかった神社であるが、僕の洛東＝朱色のイメージに合う写真であるので収録した。

—林忠彦写真集『東海道』より

常設展 同時開催

大展示室

尾崎正章常設展  
季節を感じて「春」

今回は、「春」をテーマにお届けします。風にそよぐ菜の花や可憐に咲くけしの花。やわらかな春の光に包まれた作品の数々が、会場にあたたかな彩りを添えます。

「けしの花」1970年頃  
油彩・キャンバス「菜の花(二)」1962年頃  
油彩・キャンバス

最新の情報は、当館ホームページでご確認ください。http://s-bunka.jp/kyoubi/



さて、美博再始動第1弾は、大型連休期間の恒例行事、林忠彦賞受賞記念写真展の開催です。この原稿を書いている時点では、未だに続いているウクライナ侵攻。一日も早い終結を祈るばかりですが、佐々木康さんの「ヘルソンーミサイルの降る夜に」が、「心を撃つ写真」、「その時代を一番象徴する写真」として第34回目の受賞作となったその意義を、ぜひ、皆さま自身の目で、確かめていただきたく思います。同時開催中のコレクション展では、松林桂月の南画をはじめとする季節を描いた美術作品もご覧いただけます。道端の花々に気づく余裕もないほど忙しく、大変な時期ではありますが、桜のアーチを通り抜けて、新たな思い出づくりにいらっしやいませんか。

(高橋)

ミニコラム  
ガス燈

期間を経て、いよいよ再始動となります。

令和八年、四月。暦の上では晩春ですが、多くの人たちにとっては、やはり始まりの季節ですね。周南市美術館も、3か月のメンテナンス期間を経て、いよいよ再始動となります。